11
学図
小国107

文部省検定済教科書
財団法人 教育図書研究会編修

教科書文庫
6
810
34-1949
0130449765

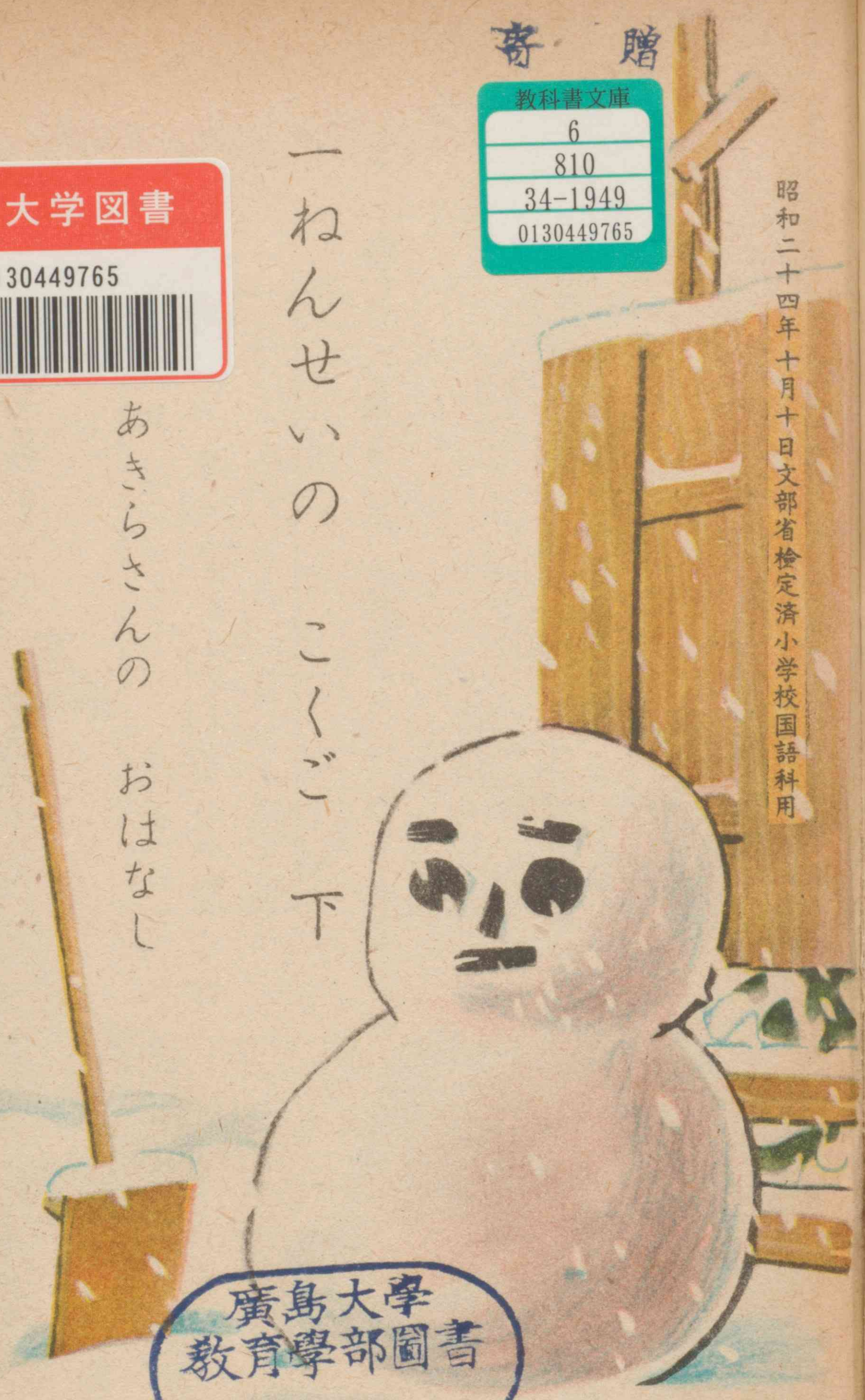
一ねんせいの こくご 下

小KC
G16

学校図書株式会社発行

60308
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449765

寄贈
教科書文庫
6
810
34-1949
0130449765
広島大学図書
0130449765



昭和二十四年十月十日文部省検定済小学校国語科用

一ねんせいの こくご 下

あきらさんの おはなし

学校図書株式会社

廣島大學
教育學部圖書

中央図書館

広島大学図書
0130449765

もくろく

一　おしょうがつの　おはなし……四

二　ゆきだるまと　ゆきうさぎ……十七

三　おはなしの　けいこ……二十三

四　おやこの　あひる……三十

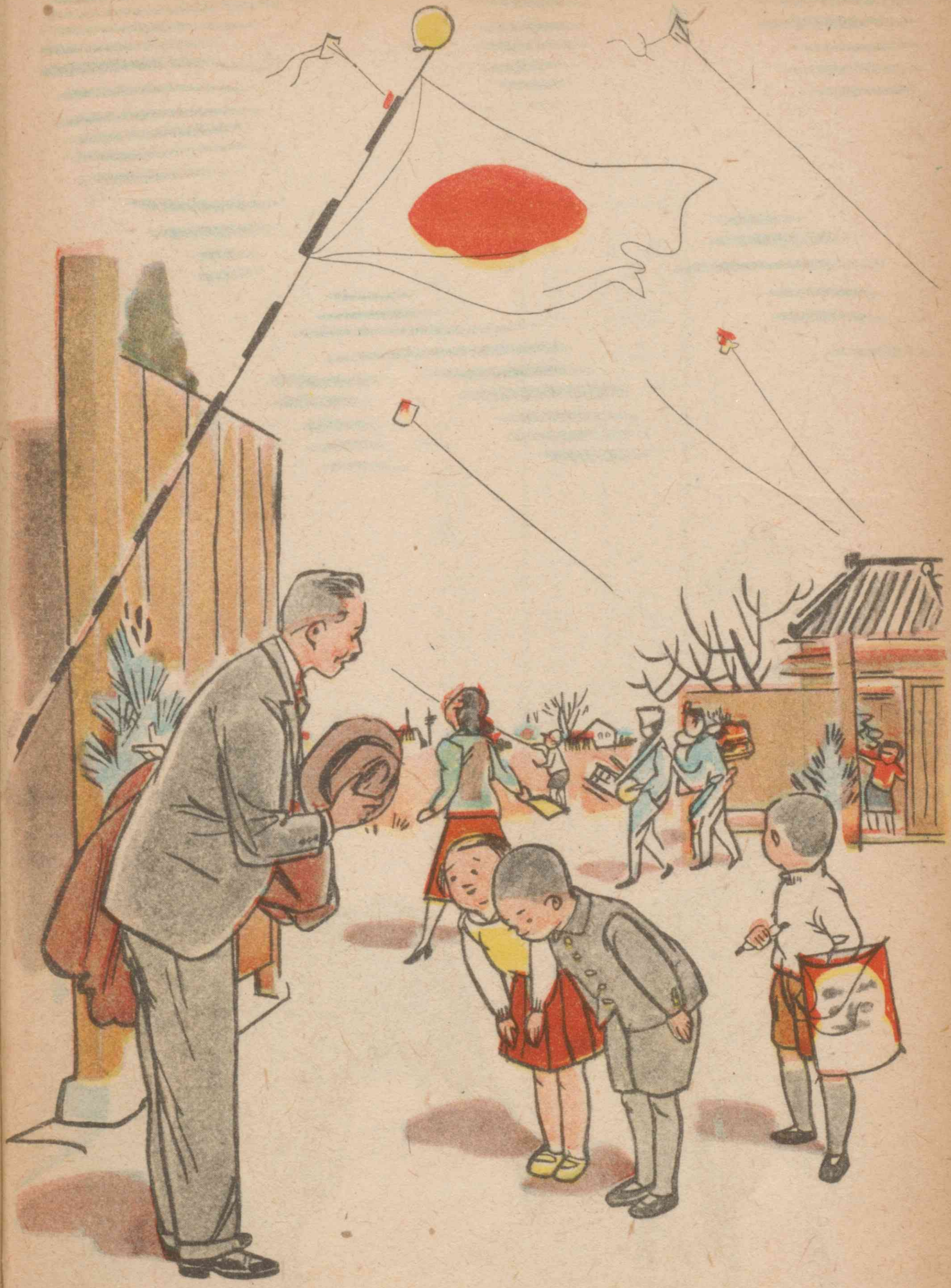
五　春の　らじお……三十二

六　もう　すぐ　二年生……四十三

あたらしく　でた　ことば……四十六

かんじ……四十七

せんせいがたへ……四十八



一　おしょうがつの　おはなし

「おしょうがつの　あそびの　おはなしを　しよう。」
と、あきらさんが　いいました。
「それは　おもしろい。」
と、みんなが　いいました。せんせいも、
「それは　おもしろい。じゅんじゅんに　おはなしを　し
て　もらいましょう。」
と　おっしゃいました。
すすむさんから　おはなしを　はじめました。

ぼくは　がんじつの　ごちそうの　おはなしを　します。

「おめでとう。」

「おめでとう。」

と　いって、ごあいさつを　しました。

それから　ごちそうを　たべました。

きんとんを　たべました。かまぼこや、こぶまきも　たべました。

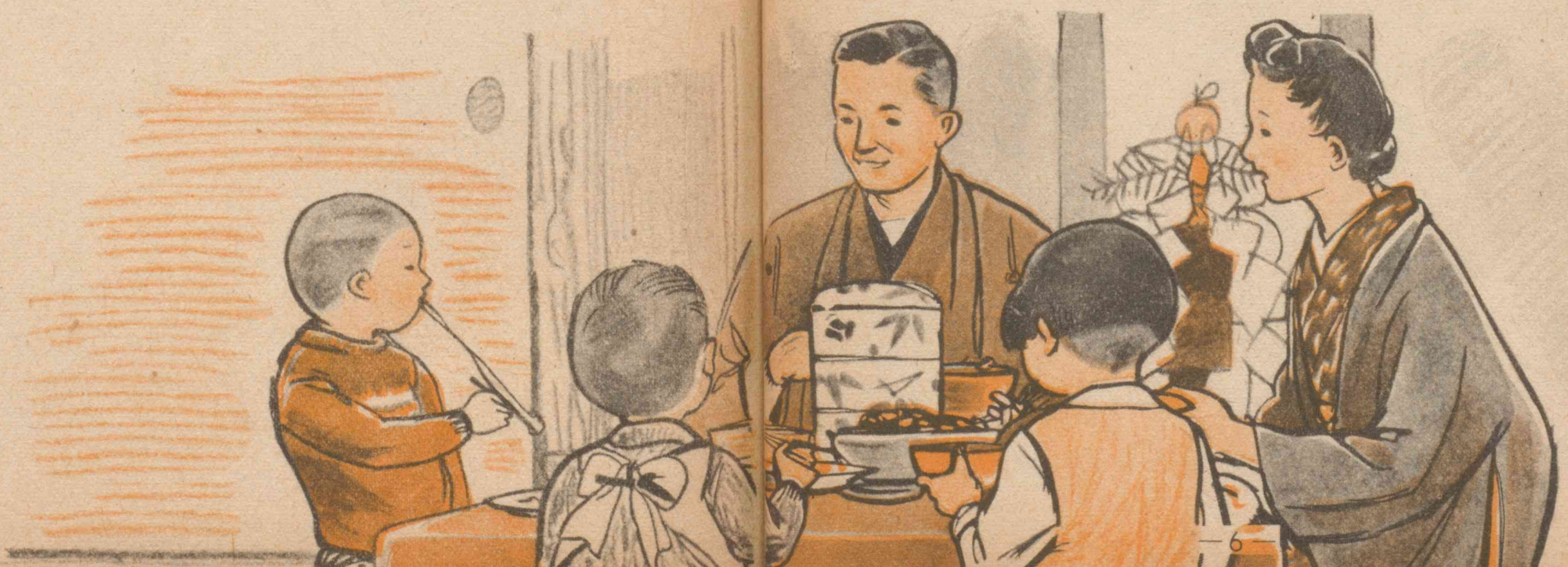
おぞうにも　たべました。

ぼくは、おぞうにが　すきなので

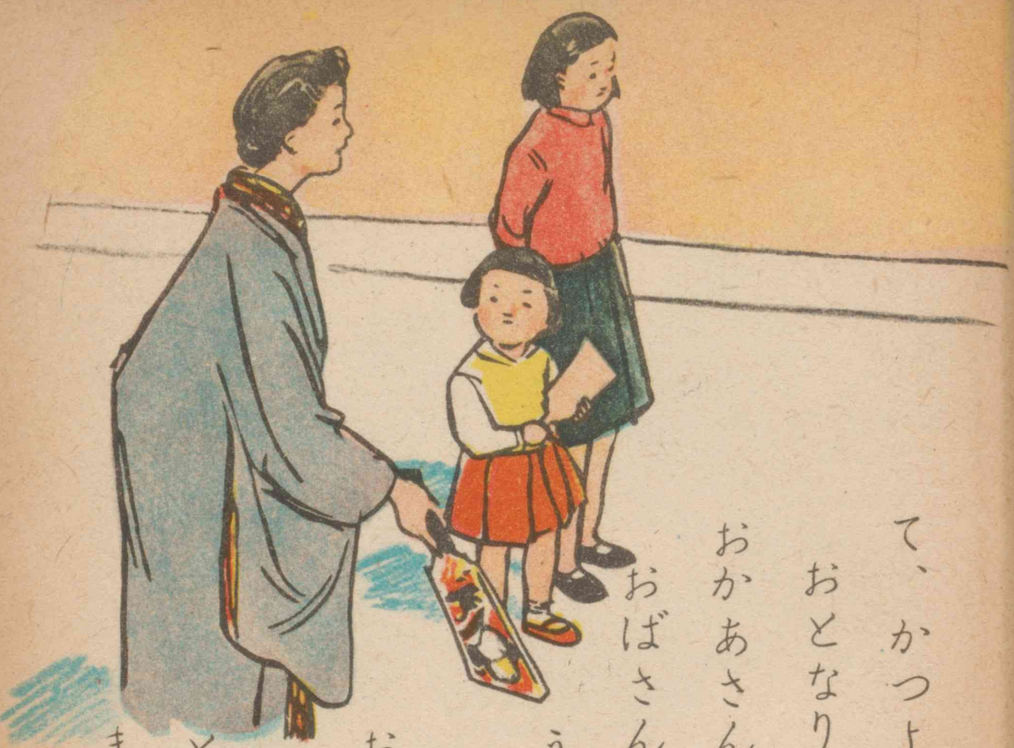
三ばい　たべました。

おしょうがつの　ごちそうは　みんな　おいしいと　おもいました。

つぎは、ゆりこさんが　おはなしを　しました。



わたくしは、おしょうがつに
はねつきを　して　あそびました。
きぬこさんと、きぬこさんの
ねえさんと、わたくしと、うちの
おかあさんと、四にんで　しました。
わたくしは　おかあさんと　くみました。
きぬこさんは　きぬこさんの　ねえさん
と　くみました。
はじめは、わたくしたちの　くみが　ま
けましたが、おかあさんが　うまく　なっ



て、かつように　なりました。
おとなりの　おばさんも　でて　きて、
おかあさんと　つきました。
おばさんと　おかあさんは、たいへん
うまく　つきました。
たいへん　にぎやかなので、
おとうさんも　でて　きて、
「大きな　おじょうさんだね。」
と　いって、おわらいに　なり
ました。

その　つぎには、まさおさんが　おはなしを　しました。

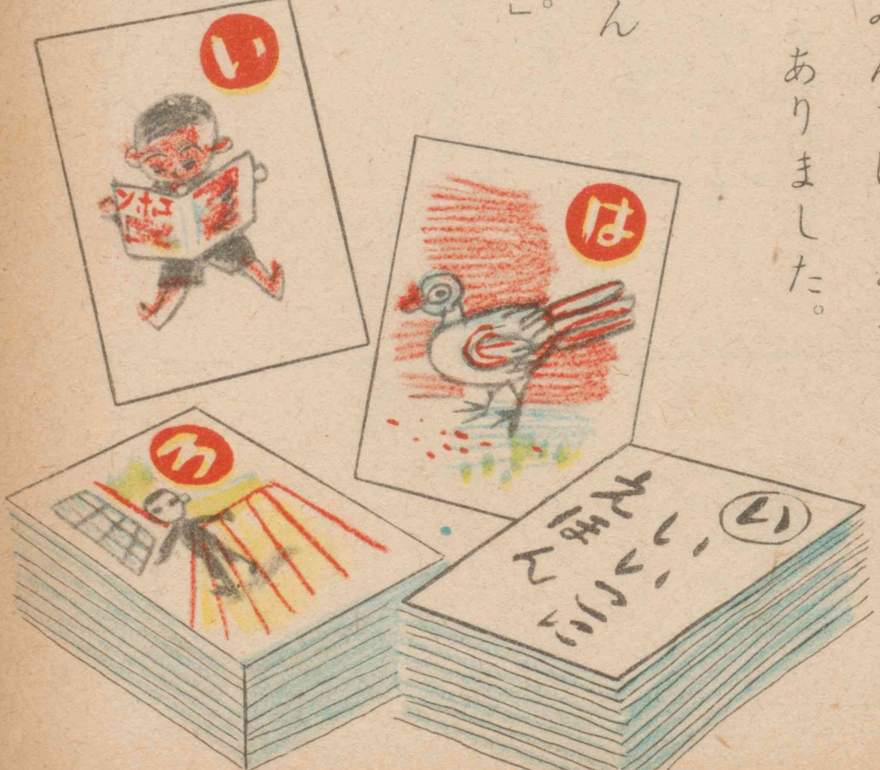
ぼくは、かるたとりを　しました。
おとうさんが　よむ　人に　なりました。
ぼくの　うまく　とれるのは、
「おいしい　おぞうに　おしょうがつ」
「てを　あらって　おべんとう」
「みんなで　なかよく　きしゃごっこ」
これだけです。

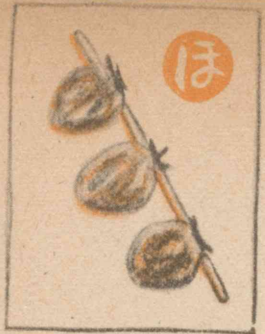
なんかい　しても、まちがいなく　とれるのは、
「おいしい　おぞうに　おしょうがつ」
でした。おとうさんは、
「まさおは　くいしんぼうだけ　あって、これだけは　よく　とるね。」
と、おっしゃったので、みんな　おおわらい　しました。

こんどは、あきらさんが　おはなしを　しました。
ぼくも　いろはがるたを　しました。ぼくは　じぶんで
つくったので　しました。
あきらさんが　ここまで　おはなしすると、みんなは
まちきれないように、
「どんなの、どんなの。」
と　いいました。

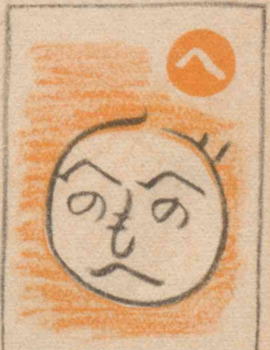
あきらさんは、だして　みんなに　みせました。
えも　じぶんで　かいて　ありました。
先生も、
「これは　おもしろい。よんで
で　きかせて　ください。」
と　おっしゃいました。

「いいこに　えほん」
「ろうかは　しずかに」
「はとは　くうくう」





「にんぎょうは　かわいい」
「ほしがきは　あまい」
「へのへのもへじ」
「とんぼの　めは　くるくる」
　あきらさんは、いろはの
じゅんに　つぎつぎと　よん
で　いましたが、すすむさん
が、



「おが　ぬけて　いるね。」
と　いいました。みんなが、
「そうだ　そうだ。」
と　いいました。あきらさんは、
「おは　あとに　でて　きます。」
と　いいました。まさおさんは、
「どうして。」
と　ききました。
「ここで　でるのは『を』です。この『を』は
はじめに　つかわないんだもの。」

と　いいました。まさおさんは、
「あ、そうか。」
と　いいました。先生は、
「いい　ところに　きが　つきましたね。みんなも　わかりましたか。『を』の　じは　ことばの　はじめには
つかいませんね。」
と　おっしゃいました。
あきらさんは　つづけて　かるたを　よみました。
みなさんも、おうちで　あきらさんのように　かるたを
つくって　ごらんなさい。

二　ゆきだるまと　ゆきうさぎ

さら　さら　さら、
ゆきが　ふる。
にわも　まっしろ、
やねも　まっしろ、
みちも　まっしろ、
あしたの　あさまで、
ゆきよ、ふれ　ふれ　ふれ、
もっと　ふれ。

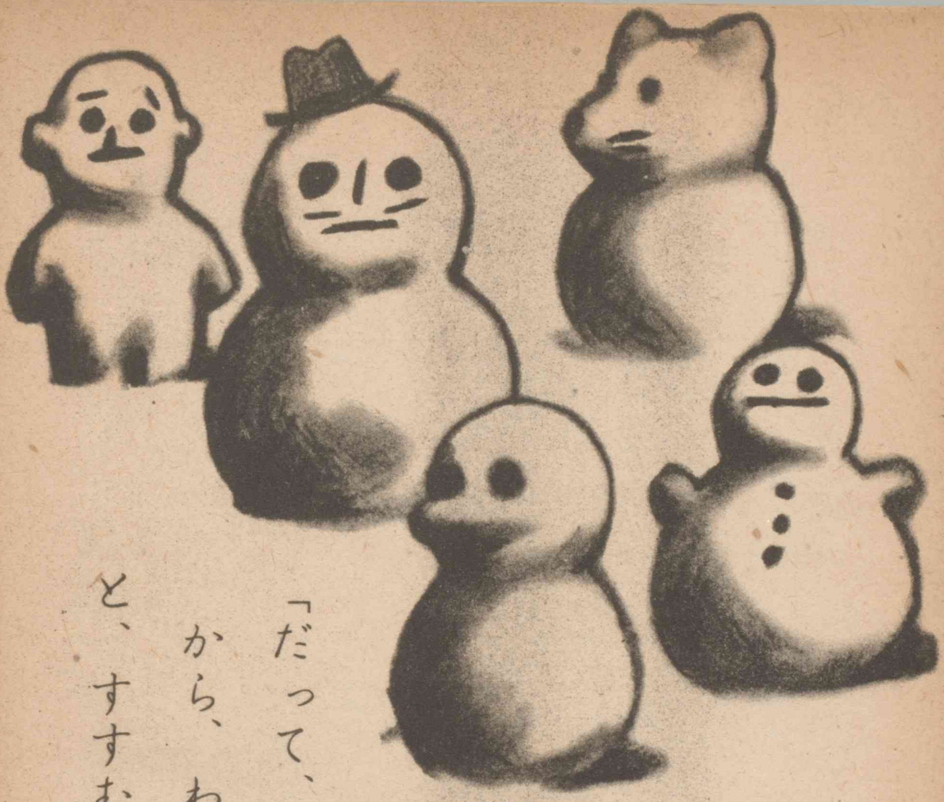
きのうからの　大ゆきで、がっこうの　にわにも　ゆきが　いっぱい　つもって　います。

ぼくたちは　ゆきだるまや　ゆきうさぎを　こしらえる　ことに　なりました。

ぼくたちは　五にんずつ　ひとくみに　なって、ゆきだるまを　こしらえました。

ぼくたちの　くみの　ゆきだるまは、ぼくの　たかさぐらいに　できました。すすむさんが　木を　ひろって　きて、はなや　くちを　つけました。まさおさんが、いしを　ひろって　きて、目を　つけました。

ゆきだるまは　おもしろい　かおに　なりました。



ゆきだるまは、わらって
いるような　かおです。
「だるまさんは　にらんで
いる　ものだよ。」
と、まことさんが　いいま
した。
「だって、ゆきが　ふって　うれしい
から、わらって　いるんだよ。」
と、すすむさんが　いいました。

「わあっ。」と　いう　わらいごえが　しました。みると、
先生が　こしらえた　ゆきだるまが　おもしろいからでし
た。
先生の　ぼうしを　かぶって　います・ひげも　はやし
て　います。
みんなで　ゆきだるまを　こしらえたので、にわは　ゆ
きだるまの　てんらんかいのように　なりました。
お日さまは　にこにこ　わらって　みて　います。

おんなの こは したじきの
上に ゆきうさぎを こしらえま
した。
木の はの、みみを つけて
あります。目は あかい はくぼ
くを つけて あります。
青い おみみ、あかい 目の
うさぎは、かわいいと おもいま
した。

三 おはなしの けいこ

「なにを しようか。」
と、みんなで がくげいかいの
そうだんを しました。
あきらさんは おはなしを
する ことに きまりました。
あきらさんは、「はしの 上
の いぬ」と いう おはなし
を しようと おもって、おけ
いこを はじめました。

にくを　くわえた　いぬが、はしの　上を　とおりかか、りました。下を　みると、川の　中にも、おいしそうなにくを　くわえた　いぬが　いました。

はしの　上の　いぬは、その　にくも　ほしく　なって、「わん」と　ひとこえ　ほえました。すると、くわえていた　にくが　川の　中へ　ぽちゃんと　おちました。しまったと　おもって、川の　中を　みると、川の　中のいぬも　にくを　くわえて　いません。いぬは、また「わん」と　ほえました。川の　中の　いぬも、「わん」とほえました。

ゆりこさんは「目を　さました　かえる」と　いう　おはなしを　よむ　ことに　きめました。

みなみかぜが　しずかに　ふく　よるでした。つちの　中で　ねむって　いた　かえるが　目を　さましました。

おや　こんなに　あたたかに　なったのかなあと　おもいました。

かえるは　かおを　あげて、
「おや、こんなに　あたたかに　なったのかなあ。」
と　いいました。
つちは　まだ　つめたいのに、
なんだか　あたたかいような
きもちが　します。
かえるは　うれしく　なって、
「そうだ、春が　ちかづいたの
だな。」
と　おもいました。

「春に　なったら、また　あの　はなの　ちる　おいけで
およごう。
月の　よい　よに、あの　ひろい　たんぼで、たくさん
の　友だちと　たのしい　うたが　うたいたい。
あきらさんや　ゆりこさんは、どんなに　大きく　なっ
て　いるかなあ。
かえるは　これからの　いろいろの　おあそびの　こと
を　つぎつぎと　かんがえました。

そんな ことを かんがえて いると、もう ねむられ
ません。
すると なにか はなしごえが きこえて きました。
じっと きいて みると、つくしの ぼうやの こえで
した。
「おかあさん、ぼく つちの そとへ でて みたく な
ったの。」
「まあ、ぼうや、もう 目を さましたの。」
「だって、なんだか つちの 中が あたたかに なって、
ねむって いられないんだもの。」

「ぼうやも そう おもうの。
つちの そとは、そろそろ
春ですよ。すみれさんも、
たんぽぽさんも、目を さ
ましたようですね。」
こんな おはなしを きく
と、かえるさんも、そろそろ
でかける よういを しよう
と おもいました。

四 おやこの あひる

こおりが そろそろ とけかけて、
おいけに はいった おやあひる。
ここまで おいでと、げえ げえ げえ。
さむくは ないよと、げえ げえ げえ。
小さな からだを よちよち させて、
かぜに ふかれる あひるの こ。
みんな ならんで げえ げえ げえ。

はいって あそぼう。
はいろか、はいるまいか、
げえ げえ げえ。
おかあさんと いっしょに、
げえ げえ げえ。

五　春の　らじお

ぶたいには、まいくろふぉんが　二つ　おいて　あります。一つは　あなうんさーが　つかいます。もう　一つは、ほうそうに　でる　おきゃくさんが　つかいます。

おきゃくさんは、みんな　じぶんの　じゅんが　くるのを　まって　います。

あなうんさー「じい、じい、じい。こちらは　こどもの　国の　ほうそうきょくで　あります。ただいまから、はるを　むかえる　ほうそうを　はじめます。

では、はじめに　にゅーすを　ほうそうします。

いままで　こどもの　国に　いらっしゃいました　きたかぜさんは、きのう　きたの　国へ　おかえりに　なりました。これで　ふゆの　お友だちは　みんな　おかえりに　なった　ことに　なります。

こんどは　おまちかねの　みなみかぜさんが、こどもの
国へ　おいでに　なります。
これからは、まい日　あたたかい　かぜが、みなさんの
かおを　なでて　いく　ことでしょう。
これで　にゅーすを　おわります。ただいまから、ひば
りさんの　ごあいさつが　あります。」
ひばり「ぴいちく、ぴいちく。
ちく　ちく　ちく。
ぴぴいちく。ぴぴいちく。ぴいちく、ぴいちく。
ぴいぴいぴいちく。ぴい、ぴい、ぴい、ぴい。」

あなうんさー「おわかりに　なりましたか。いまの　ごあい
さつを　こどもの　国の　ことばに　しますと、
『ぼくは　青空が　大すき。うたうのが　大すき。こど
もの　国の　みなさん、青空の　下で　げんきに　なか
よく　うたいましょう。』
と　いう　ことに　なります。
ひばりさん、ありがとう　ご
ざいました。
つぎは　もんしろちょうさん
の　おはなしです。」

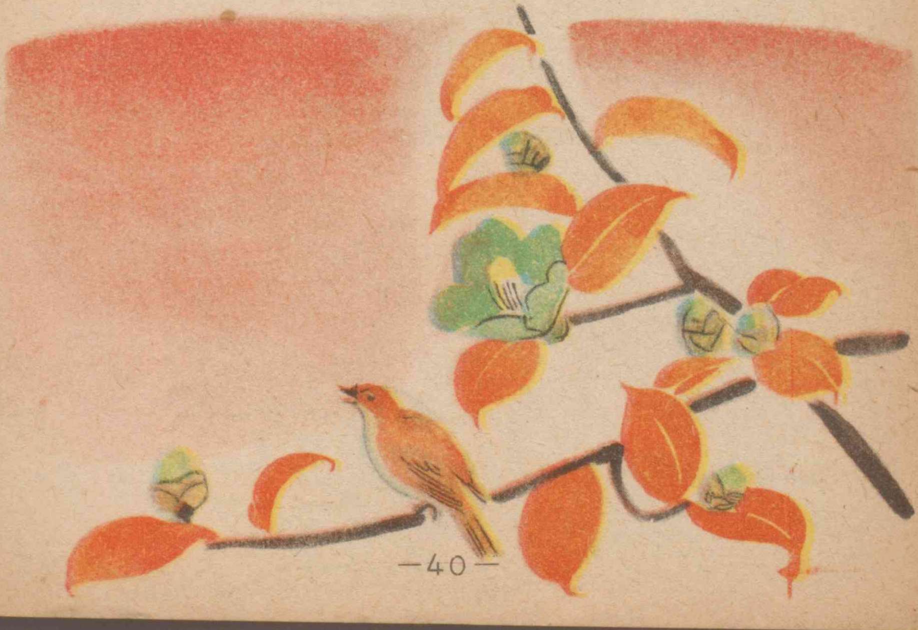
もんしろちょう「わたくしは　もんしろちょうです。わたくしは　ひあたりの　よい　なたねばたけで　うまれました。はじめて　目を　あけた　とき、なたねさんの　きれいな　はっぱや　きいろい　はなを、たいへん　うつくしいと　おもいました。わたくしは　ひとりで　うまれましたので、お友だちが　ほしく　なりました。

いちど　わたくしは　ひらひらと　おそらに　あがって　みましたが、かぜで　はねが　とれそうなので、びっくりして、また　なたねさんの　ところに　かえって　きました。
ある日、のはらに　あそびに　でかけた　ときの　ことです。わたくしは、むらさきいろの　ちいさな　はなを　みつけました。なまえを　きくと、
『すみれよ。』と　こたえました。
かわいい　すみれさんは、春かぜの　中で　わらって　いました。

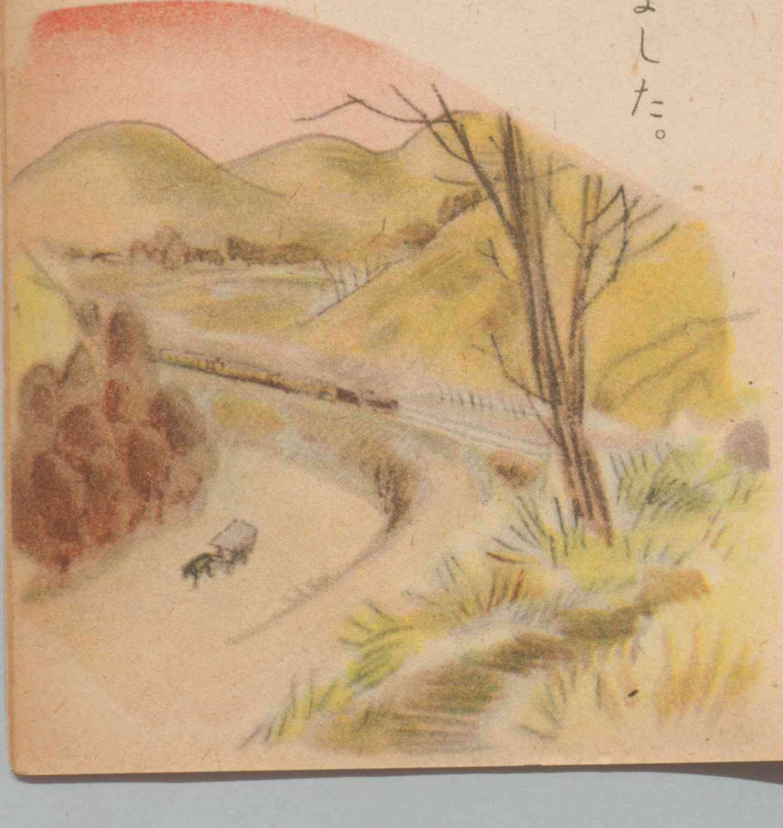
わたくしは　この　ことを　なたねさんに　おはなしし
ました。なたねさんは、『春が　きたのさ。』と、たのし
そうに　いいました。」
あなうんさー「ありがとうございました。ただいま　おはなし
して　くださいましたのは、もんしろちょうさんでし
た。もんしろちょうさんは、こどもの　国の　なたねば
たけで、まいにち　はたらいて　いらっしゃいます。
春を　むかえる　ほうそうも　そろそろ　おわりに　ち
かづきました。おしまいに　ほうそうして　くださいま
すのは、こどもの　国の　しちょうさんです。

しちょうさんは、きょうは　ごじぶんで
おつくりに　なった、『春を　むかえる
うた』を　およみに　なります。
では　しちょうさん、どうぞ。」
しちょうさん「きたかぜが、
きのうは　やねの　うえを
ふいて　いきました。
きょうは　みなみの　かぜが、
まどかけを　しずかに
ゆすって　いきました。

ぼくは　にわに　でて
みました。
ことりが、つばきの　え
だで　ないて　います。
どこからか、あまい　く
さの　においが　して
きます。
お日さまが　わらって　います。



ぼくは　たかい　ところに　のぼりました。
山の　かげから、きしゃが　はしって　きました。
ぼくは　てを　ふりました。
きしゃは　とおくへ　いきました。
『おうい。』と、
だれかが　よんで　います。
『おうい。』と、
だれかが　こたえます。



それで、春が　きたぞと、
ぼくも　ちから　いっぱい　よびかけました。
からだが　ごむまりのように　はずむ、
うれしい　あさでした。」

あなうんさー「これで、この　ほうそうを　みんな　おわる
ことに　します。
みなさん、さようなら。」

六　もう　すぐ　二年生

どこかで　うぐいすが　ないて　いる。
かみで　こしらえたような、
うめの　はなが　さいて　いる。
もう　すぐ　わたくしたちは
二年生に　なる。

ひらがなが　みんな　よめる。
ひらがなが　みんな　かける。
もう　二年生に　なれる。

しろい　くもが　うかんでいる。
あの　くもから、
春が　やってくる。
けさは　うれしい　あさだ。

二年生に　なったら
きょうしつは　どこだろう。
となりの　きょうしつだろうか。
にかいだろうか。

ぼくは　まどがわに　すわるかしら。
先生の　すぐ　まえかしら。
はやく　二年生に　なりたい。
「ほう　ほけきょ。」
「ほ　ほう　ほけきょ。」
ぼくも　いっしょに　うたいたい。

あたらしく でた ことば

あいさつ……六
あまい……一四
あと……一五
あした……一七
あさ……一七
あなうんさー……三二
いし……一九
いぬ……二三
いけ……二七
うまく……八
うれしい……二〇
うまれ……三六
うつくしい……三六
うぐいす……四三
うめ……四三
えだ……四〇
おっしゃる……五
おめでとう……六
おぞうに……七
おいしい……七
おとなり……九
おじょうさん……九
おひさま……二一
おや……三〇
おわり……三四

がんじつ……六
かまぼこ……六
かつ……九
かるたとり……一〇
かわいい……一四
かお……一九
がくげいかい……二三
かえる……二五
からだ……三〇
かげ……四一
きんとん……六
き……一六
きのう……一八
きもち……二六
ぎた……三三
きょうしつ……四四
くみ……八
くいしんぼう……一一
くち……一九
くわえる……二四
くに……三三
くさ……四〇
くも……四四
けいこ……二三
げんき……三五
こぶまき……七
ここ……一二

この……一五
ことば……一六
こしらえる……一八
こおり……三〇
ございます……三五
ごむまり……四二
さます……二五
じゅんじゅん……五
じぶん……一二
しずか……一三
したじき……二二
じっと……二八
しちょう……三八
すると……二四
すみれ……二九
すぐ……四五
それ……五
そうだん……二三
そろそろ……二九
だるま……一七
だって……二〇
たんぼ……二七
たんぽぽ……二九
たのしい……三八
だれ……四一

ちる……二七
ちから……四二
つぎ……七
つかう……一五
つづける……一六
つもる……一八
つめたい……二六
つくし……二八
つばき……四〇
できる……一九
てんらんかい……二一
とれる……一〇
どんな……一二
ともだち……二七
とけかける……三〇
どうぞ……三九
なかよく……一〇
なでる……三四
なたねばたけ……三六
なまえ……三七
にぎやか……九
にらむ……二〇
にく……二四
にゅーす……三三
におい……四〇

にねんせい……四三
にかい……四四
ねえさん……八
ねむる……二五
のぼる……四一
はねつき……八
はと……一三
はやす……二一
は……二二
はくぼく……二二
はる……二六
はねる……三七
はたらく……三八
はずむ……四二
ひげ……二一
ひばり……三四
ひあたり……三六
ひらがな……四三
ぶたい……三二
ふゆ……三三
ほしがき……一四
ほえる……二四
ほうそう……三二

まさおさん……一〇
まちがい……一一
まだ……二六
まいくろふぉん……三二
みみ……二二
むらさき……三七
もらう……五
もの……二〇
もう……二八
もんしろちょう……三五
やね……一七
ようい……二九
よんで……四一
ろうか……一三
わらう……一九
わかる……一六

大 (9)　人 (10)　先 (13)　生 (13)

木 (19)　目 (19)　日 (21)　上 (22)

青 (22)　下 (24)　川 (24)　中 (24)

春 (26)　月 (27)　友 (27)　小 (30)

国 (33)　空 (35)　山 (41)　六 (43)

年 (43)

教師ならびに父兄のかたがたへ

この本は、小学校一年の国語教科書の第三巻として編修しました。

プレプリマー（入門予備）、プリマー（入門）、のあとをうけて、いよいよ、最初の読本という形をとりました。

したがって、文のかたちも、詩、生活発表のおはなし、物がたり、劇など、各種について国語教育として必要なものの初歩的なものを一応そろえました。

検定規準によったことはもちろん、とくに子どもの生活に即することを考え、日常手ぢかな生活とともに、子どもの想像、空想の世界までも題材にとることにつとめました。

そうして、あかるく、楽しむ間に、国語の学習をすすめることをもくろみました。

なお、本書では、平易な漢字を二十一字出しました。

小国107

Copyright 1949, by
The Kyōiku Tosho kenkyukai

All rights reserved
The text of this publication or any part thereof may not be reproduced in any manner whatsoever without permission in writing from the authors.

一ねんせいの　こくご　下

Approved by Ministry of Education
(Date Jun. 24, 1949)

編者　東京都文京区大塚窪町
東京高等師範学校附属小学校内
財団法人 教育図書研究会
理事長　東京高等師範学校教授　佐藤保太郎
担当執筆者　東京高等師範学校教諭　田中豊太郎
〃　花田哲幸
〃　青木幹勇
〃　森下巖
〃　小島忠治

表紙とさしえ　田原輝夫　大槻定雄

印刷　昭和二十四年六月二十四日
発行　昭和二十四年六月二十八日

定価　円

著作者　財団法人 教育図書研究会
会長　務台理作

発行者　学校図書株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

印刷者　図書印刷株式会社
代表者　川口芳太郎
東京都港区芝三田豊岡町八番地

発行所　学校図書株式会社
東京都港区芝三田豊岡町八番地

本書の指導書・ワークブック・註釋書並びにこれに類する一切のものの無斷發行を禁ずる。

広島大学図書
0130449765